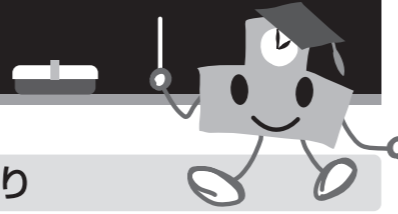


小学校の事例 北区 和光小学校

自然とふれあい、地域の環境を学ぶ。 児童が実感・体感できるビオトープ。

札幌市より費用の支援を受けず、PTAと地域の協力でビオトープをつくった。都会暮らしの児童にとってビオトープは身近な自然であり、格好の遊び場になっている。体感や観察をとおして自然を守りたいという意識が芽生え、地域の環境へも目を向けるようになってきている。



はじめに PTAと地域の協力でビオトープづくり

本校のビオトープは、平成16年に創立40周年記念事業として企画され、学校からPTAや地域に呼びかけてつくられた。当初、かかった費用は、10万円程度。すべてPTAの予算や保護者の寄付などによってつくられており、札幌市からは費用の支援を受けていない。

PTAの取組として文部科学省から表彰され、その話題は新聞にも掲載されている。



中庭にあるビオトープ

内容 アオサギもやってくる自然のままの空間に

ビオトープは、bio(生き物)とtop(場所)を組み合わせたドイツ語の合成語で、「野生生物の生息・生育空間」という意味がある。学校でのビオトープづくりは全国各地で行われているが、本校の通学区内においては自然とふれあえる空間はほとんどなく、ビオトープは都市に住む児童に身近な環境教育の場として期待されている。

本校のビオトープは、PTAの尽力、地域の協力のもとに、児童、先生、保護者、町内会が一体となって参加し、学校の敷地の一角に設けた。可能な限り自然石を使い、植物も地域の植生にあったものを植え、枠に用いた木も学校のものを使用している。

最初のうちは草を刈るなどして手入れを行っていたが、人工的ではない、本来の自然を児童に見せたいということで、今は必要最小限の整備のみにとどめている。年1回草を刈ったり、池にたまった泥を取ったり、また、水が足りなくなったら水道水を入れたりする程度で、普段は雨水などの自然の循環にまかせている。

学校長と用務員が川や池でとった魚を放している。現在は魚、カエル、ヤゴ、メダカ、微生物などが生息している。アオサギが魚を食べに飛来することもある。

これらの植物や生物の観察をとおして、児童の中に自然を守り、育てたいという意識が芽生えてきており、ビオトープにいつそうの親しみと関心をもつようになってきている。

効果 観察や遊びをとおして 環境への関心がより高く

現在、学校内にビオトープに生息・生育する動・植物の写真が貼っているが、教科書に載っている写真ではなくこれらの生き物を生で観察することができ、児童は興味津々。川や池の魚を「ビオトープの池」と「水槽」の2つに入れると、「ビオトープの池」の魚は日焼けをし黒くなる。このような自然が与える動植物への影響を目の当たりに観察でき、児童の自然や環境に対する関心は高まっている。

どんな環境だと動・植物にとって棲みやすいのか、棲みやすいビオトープをつくるには何が必要かなど、生き物と環境との関連や季節による環境の変化を意識するようになってきた。

本校の界隈に整備された児童公園はあるが、野生の生物や植物が育つ自然の環境はない。都会暮らしの児童にとってはビオトープが日常的にふれあえる身近な自然であり、低学年の児童には格好の遊び場になり、ビオトープに集まるようになってきている。



池のようす



ビオトープの山から見た景色

今後 自然と親しむことが 環境学習の第一歩

環境学習は、言葉で伝えたり、考えさせるより、体感・実感させることが重要である。ビオトープづくりも、まず、児童に自然と楽しく親しんでもらうことが大切である。生物が生きるために必要な環境を実際に目で見て、間近で学ぶことで、児童の関心が地域の環境や自然にまで向けられるようになる。そんな環境学習が望ましい。

また、本校ではPTAや地域ぐるみで取り組んでいることもあり、ビオトープを地域の方の記憶にも残る、もっと開かれた場所にしたいと考えている。

地域とコミュニケーションを交わし、連携・協力しあいながら、ビオトープづくりの活動に積極的に取り組んでいる。



校舎とビオトープ

広げよう つなげよう 環境学習の輪



実施校から メッセージ

本校の周辺には自然環境がほとんどなく、ビオトープは児童が自然とふれあえる人気の場になっています。言葉で学んだり、教科書で学んだりするよりも、楽しみながら生の自然を実感し、体感してもらうことが環境学習にとって何よりも大切なことだと思います。しかし、一方で、このビオトープをカリキュラムにどう取り入れ、自然に関心をもち始めた児童の活動を支えるのに何を題材とすればいいのかについては、これからも検討していく必要を感じています。